

通時的・統語論的視点から見たcareとcureの意味の相違 —— care概念を考えるひとつの視点として

江 藤 裕 之

【要 旨】 ケア概念は看護研究において中心的な位置をしめている。1980年代以降、多くの看護学者によりケア概念の分析がなされてきたが、明快な定義を与えることは容易ではないようだ。本稿では、ケア概念を考えるひとつの視点を与える目的で、「ケア」の原語である英語careと、careとよく対比されるcureの語法を、その語源、歴史的意味変遷を踏まえた上で、統語論的視点から分析、比較した。その結果、動作動詞としてのcureに対し、状態を表す動詞であるcareについて、サービスを提供する行為や技術も重要であるが、「気持ちが向いている」という心の状態がこの語の本質的な意味であるという結論を得た。このことは、看護研究で主張されるさまざまなケア概念の分析を支持する視点を提示することになり、また、ケアは看護者のみならず、よく生きるための行動指針として、すべての人間が考えるべき概念であるということを強調する論拠ともなる。

【キーワード】 ケア、キュア、概念分析、語源、語法

はじめに

看護研究や看護実践において、「ケア」と「キュア」という語は明確に使い分けられているようだ。しかし、その区別はそれぞれの語の絶対的な概念規定によるものではなく、あくまでもこの二つの語の相対的な意味関係によるものではないだろうか。そこには、「ケア」の概念について必要かつ十分な規定が行なわれないまま、「キュア」のカバーする意味範囲の中に入りにくいものは、無批判に「ケア」に含めておくという態度が見受けられる。その原因のひとつは、「ケア」なる語のもつ意味の広さ、悪く言えば、その曖昧さにあると言えよう。

「キュア」の方は「治療」、つまり、「病気やけがを治すための医学的処置」として簡潔明瞭に定義づけることができる（常葉，1992；ステッドマン医学大辞典編集委員会，2002）。その一方で、「ケア」についての明晰かつ判明な定義を見つけることは容易ではない

（近田，1993）。もちろん、このことは必ずしも研究者の怠慢を意味するものではない。1980年代の始めから、看護研究の分野において「ケア」概念に関する研究や議論が活発に進められているが（Reich, 1995）、なかなかひとつのコンセンサスにまで至らないようである（筒井，1993；Reich, 1995；操，羽山，菱沼他，1996；佐藤，井上，新野他，2004）。これは、まさに「ケア」の概念化が容易ではないことの証左ではないだろうか。

「キュア＝医師による治療」、「ケア＝看護職者による看護」という二項対立的な解釈は、「医療の専門家として患者に治療を行う医師」に対する「患者に対するケアの専門家としての看護職者」からの主張として理解できる。しかし、これにより「ケア」の定義が十分になされたというわけではなく、「ケア」は医療現場において単なる「キュア」の対概念として漠然と位置づけられているに過ぎない（日野原，永井，中西他，1995）。さらに、「ケア」なる語は、医療や介護・福祉の領域を

超えた学問・実践分野においても、そして、日常の場面でも広く使われており（山岸，1996；安藤，1999；伊藤，稲吉，2001；生田，2002；齋藤，2003），そのことがケア概念の包括性と曖昧さに拍車をかける要因となっている。

本稿では、「ケアとは何か？」という問い、つまり、「ケア」という語の概念規定の試みを念頭に置きながら、ケア概念を考えるひとつの視点として、「ケア」と「キュア」の意味の違いについて考えてみようと思う。これらの語は英語をそのままカタカナ表記したものであるため、ここでは原語であるcareとcureを考察の対象とする。具体的には、史的言語学の視点からcareとcureの語源的意味の相違を概観し、その相違が通時的統語論の立場、すなわちcareとcureの文法的な用法の分析からも支持されうるかを検討することで、careとcureの本質的な意味の相違点を詳らかにし、care概念の分析と理解に「ことば」からの視点を提示したい。

careとcureの根本イメージと意味分化

筆者は、かつて、史的言語学の立場からcareとcureの意味的關係を論じたことがある（江藤，2002；2005）。まず、careのもつ根本イメージとcareとcureの意味分化について、この論考の要点を紹介しよう。注1

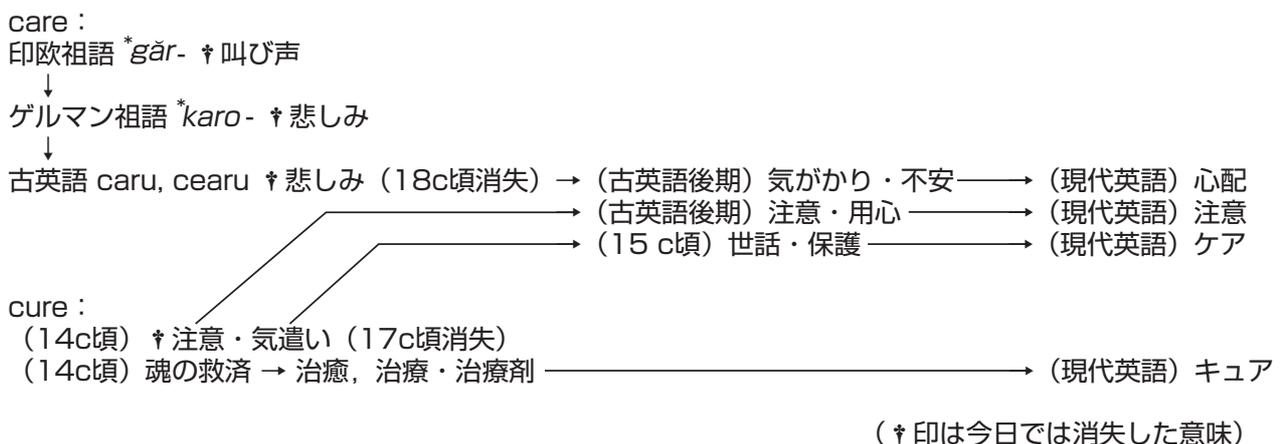
現代英語careは、「心配，悲しみ」を意味する古英語caru, cearuから、「心配」という意味のゲルマン祖語*karo-（*は文献上確認不可であるも音韻法則的に推測可能な語形を示す），さらには、「叫ぶ，悲しみ叫ぶ」

という意味の印欧祖語*gār-にまで遡る。つまり、careはゲルマン系の語であり、語源的には「心配(anxiety)」、「悲しみ(sorrow)」、「叫ぶ(cry, shout)」という意味であった。ここから、careは「人間が悲しいときに発する声」に由来し、その根本イメージは「何か悲しくなるものを見たときに声をあげんばかりに心から心配している（自分の気持ちがその方向に向いていること）」と考えることができよう。これは、careを論ずる際に「共感(sympathy)」や「注意(attention)」という概念が並行する（Reich, 1995）ことを理解する上で示唆的である。

careに比べcureの語源追跡は難しい。現代英語cureは、care, healingを意味するラテン語curaに由来するが、それ以上語源を遡ることができない。このラテン語curaがフランス語を経由してcureとして英語に入ってきたのは1300年頃であり、その最初の意味は「注意，気遣い」であった。後に、中世を通じ教会用語として「魂の救済」、「信仰の監督」という意味が生じ、14世紀の終わりには「治癒」という意味での使用が見られ、またシェークスピアの頃（17世紀）には「治療法，治療剤」という意味が現れる。現代英語のcureには、「〈患者・病気を〉治療する，〈悪癖を〉矯正する；…の〈病気・悪癖を〉治す」，「《塩漬け・乾燥または燻製にして》保蔵処理する」という意味しかなく、これは原義である「注意，気遣い」の比喩的用法と見てとれるが、原義そのものは廃れてしまった。

以上の解説から、careとcureの意味変遷と意味分化の過程は下図のようにまとめることができる。

図 careとcureの意味の変遷と関連（江藤 [2002；2005] に修正を加えた）



歴史的に見ると、「気遣う」や「注意する」という意味において、careとcure（ラテン語cura）には意味的に重なる部分も多く、また語形も酷似していることから、同じ源から派生したかのような印象を受ける。しかし、careとcureを語源的につなげる言語学的根拠を記した文献は今のところ見つからない。careとcureの意味分化の過程で注目すべき点は、ラテン語（ロマンス語）系の語cureが元来もっていた「注意、気遣い」という意味がゲルマン語系のcareへと流れることで、cureからその意味が消失し、今日の用法ではcureには「魂の救済、治癒、治療」の意味だけが残り、careとは区別されるに至ったということであろう。

careとcureの通時的・統語論的な意味の相違

以上の論考から、現代英語においてcureが「治療」の意味に限定され、careが「心配、注意、気遣い」などを包括した広い意味をもつようになった歴史的な経緯は理解できた。この違いが、医療現場において「ケア」と「キュア」の用法上の相違を生む。

では、次に通時的な視点からcareとcureの違いを吟味してみたい。つまり、careとcureの統語論的（文法的）な違いが、以上の歴史的な語義変遷に基づいたcareとcureの現代英語における意味の相違と関連があるかどうかを見てゆきたい。

1. cureの語法

まず、cureの語法を見よう。cureは名詞、もしくは、動詞として使われるが、ここで重要なのは動詞としてのcureの用法である。というのは、動詞の用法を調べることでこの語の主体と対象が明らかになるからである。

学習英語辞書でcureの用法を調べると（Sinclair, 1995；市川, 1995；小西, 2001）、その主な特徴を次の二点にまとめることができる。

- ① cureは他動詞である。
- ② cureの主語（主体）は医師、もしくは薬・治療法であり、目的語（客体、対象）は病気・痛み・傷、もしくは病人である。

つまり、動詞cureは次のような使われ方をする。

The doctor *cured* the pain in my back.

[その医師は私の背中の痛みを治した]

→主語は「医師」、目的語は「痛み」。

The medicine *cured* the sick children.

[その薬はその病気の子どもたちを治した]

→主語は「薬」、目的語は「病人」。

The treatment *cured* his injury.

[その治療法は彼の傷を治した]

→主語は「治療法」、目的語は「傷」。

The doctor *cured* him of the disease.

[その医師は彼を病気から治した]

→主語は「医師」、目的語は「病人」。

最後の例文には少し解説が必要である。The doctor *cured* him of the disease.では、cureという行為が直接およぶのは人間（病人）であるhimであり、病気ではない。そして、of the diseaseの部分は「その病気から」、「その病気（の範囲内）において」という意味である。つまり、この英文は簡単に訳せば「その医師は、彼の病気を治療した」でよいが、厳密に直訳すると「その医師は、彼をその病気から（その病気の範囲内において）治療した」となる。^{注2}

いずれにしても、動詞cureにおいて、その動作が直接に働きかけられる対象（目的語）は「病気（痛み・傷）」、もしくは「病気（痛み・傷）をもった人」ということになる。したがって、cureする主体（主語となるもの）は、病気を治療し、病気を患っている人（病人）や怪我人を治癒させる能力・技能・資格をもった人間（医師）、もしくは、手段（薬・治療法）となる。このことは、前章で説明したように、現代英語においてcureの意味が「治療」に限定されたという点にも矛盾しない。

また、We have to cure the present economic problems. [私たちは目下の経済問題を治療しなくてはならない]やNobody can cure his heavy drinking. [誰も、彼の飲みすぎを治すことはできないだろう]などのように、cureの対象が病気や病人ではなく、社

会問題や悪癖になることがある。しかし、この場合はそういった問題をひとつの「病」に見立てたアナロジカルな表現とみなしてよい。

2. careの語法

それでは、careの場合はどうであろうか。cureと同じように、careも名詞、または、動詞として使われるが、やはり重要なのは動詞としてのcareの用法である。その主な特徴は次の三点である。

- ① careは自動詞である。注³
- ② care about～となって、aboutの次には、心配する人・もの、気にする人・もの、関心のある人・ものなどがくる。
- ③ care for～となって、forの次には、世話をする人・ものがくる。

具体的には動詞careは次のような使われ方をする。

Her mother *cared about* her health.

[彼女の母親は彼女の健康を心配した]

→心配する気持ちが向いている先は「彼女の健康」。

I don't *care about* money.

[私はお金のことは気にしない]

→気遣う気持ちが向いている先は「お金」。

Our company *cares about* the environment.

[わが社は環境に関心がある]

→関心が向いている先は「環境」。

She *cared for* his dog during his absence.

[彼の留守中、彼女が彼の犬の世話をした]

→世話をしようという気持ちが向いている先は「彼の犬」。

They *cared well for* the brand-new car.

[彼らはその新車をとても大切にした]

→大切にしようとする気持ちが向いている先は「車」。

以上に挙げた動詞careの語法を、前章で説明したcareの語源的意味と関連させて説明してみよう。

careは「悲しみ」という原義から、「心配、注意、関心、世話」といった意味が派生した。そこから、

careの根本イメージを「何か悲しくなるものを見たときに声をあげんばかりに心から心配している（自分の気持ちがその方向に向いている）こと」と解釈した。たしかに、今日の英語ではcareに「悲しみ」という意味はない、しかし、何か自分が気にしたり、心配したり、心を込めて世話をしているものが悪い状態になれば人の情として悲しくなるのは当然ではないだろうか。上の例で言えば、彼女の健康が損なわれたり、環境が破壊されたり、彼の犬の具合が悪くなったり、車が壊れたりすれば当の本人は悲しい気持ちになるはずだ。

もちろん、悲しくなるようなものを見たときに気にせず、無視することもできる。しかし、これも人の情として、それを見たら悲しい気持ちになりそうだからこそ無視するのであり、自然と自分の「気持ち（心）が向いている」からだと言えるのではないだろうか。よって、「自分の気持ち（心）が向いていること」がcare概念の中心をなすものとなる。それが、care about～であれば「～について（～のまわりに）自分の気持ちが向いている」となり、care for～であれば文字通り「～に向けて（～の前へと）自分の気持ちが向いている」となる。したがって、「気持ちが向いている」ということから、care for～には「～を世話する」という意味の他にも、古い用法として「～を好む」や「～を望む」という意味もあることが理解できる。

3. careとcureの語法上の特徴

他動詞cureは、cureするものとcureされるものとの関係が明快であり、cureという行為はcureされるものに直接およぶ。よって、cureは動作（作為）動詞とみなすことができ、 A cure B。という文のBには直接的にcureされるもの、すなわち、病人や病気・怪我そのものがくる。そして、Aには病人や病気を治す能力、技能、資格、可能性を有するものが入る。その意味で、cureにおいては、cureするものとcureされるものとの関係が直接的であり、cureするものとcureされるものが入れ替わることはない。わかりやすく言えば、医師が患者の病気をcureしたからといって、そのことで医師の病気がcureされることはない。

それに対し、自動詞careは状態を表す動詞と考えてよい。つまり、careという状態は、何かの対象に直接

働きかけることはしない。care about ～やcare for ～となるように、あくまでも、「～のまわりに (about)」, もしくは「～に向かって (for)」, careの主語の気持ちが向いている状態にあることを言う。したがって、C care about D . や C care for D . のDには、それが「気持ちが向いている」対象であれば、人、動物、物体、事象を問わず何でも入ることが可能となる。同時に、Cにくるものとしては、cureの場合とは異なり、特にこれといった技術や資格がなくとも「気持ちを向けることができる」ものであればよい。少なくとも、結果として気持ちが向けられるというのであれば、十分にcareの主語となりうるのである。

さらに、悲しみからcareという心の状態が生ずるのであれば、careという心の状態が向かう先のものを意識し、そこに「手当て」をしようとする中で、その「悲しみ」を克服することができる。つまり、「ケアする」ことにより、その行為者自身 (care-giver) が悲しみを超え、その結果として心が癒され、幸福感に満たされる可能性が生ずる。ゆえに、よく言われる「ケアすることによってケアされる (心が癒される)」ということは単なる印象だけの問題ではなく、ケアを与えるものと与えられるものとの関係性から生じるひとつの必然的な結果とも言えよう。その意味で、ひとりの人間をケアすることはケアする者自身の成長に還ってくるという主張は (Mayeroff, 1971), この視点からもよりよく理解されるのではないだろうか。

おわりに

以上、careとcureの語義と用法に注目して、その意味を考えてみた。歴史的には、この二つの語は「注意、気遣い、世話」という意味で語義的に重なっていた。しかし、cureが医学的処置、すなわち医療技術をもってする治療という意味に限定されたことで、広い意味での「注意、気遣い、世話」はcareがカバーすることとなった。その結果、「はじめに」にも記したように、careは包括的、かつ曖昧な語となった。

cureが「治療」という意味に限定されたことで、医療現場での患者に対するcure以外の行為をcareとみなすという論には納得がいく。しかし、careが何らか

の具体的な行為そのものをさすのではなく、あくまでも患者に気持ちが向いているという心の状態であるとすれば、治療 (cure) もひとつのcareの具体的な行為として解釈されるはずである。つまり、medical careは、医師が患者に診断や処置 (cure) を与える行為を伴ったcareのひとつの形として考えることができよう。その意味で、医療現場における看護 (nursing) もcareのひとつの形 (nursing care) と言える。ゆえに、「看護はケアである」という命題は正しいが、「ケアは看護である」という命題は一考を要する。もちろん、医療現場において看護はケアの極めて重要な部分を受けもつことは誰もが認めるところであるが、看護はあくまでもケアの一部ということになる。

専門的技術を要求される看護の目指すものはケアであり、看護実践におけるさまざまな方法は結果としてケアを実践する手段ということになる。しかし、ここでもう一度確認しておかねばならないことは、「ケアする」とは、その相手に対して気持ちが向いている、つまり、相手を思いやるということであり、ケアの実践においては、この相手を思いやるという「気持ち」が極めて大切であるということだ。「ケア」には、「サービスを提供するという行為」と「心のもちかた」の二つの側面があるとされ (Paley, 2006), そのことがケア概念の理解を複雑にしている一要因である。「ケアする」上で、行為や技術そのものも重要であることは言うまでもないが、それはcareという語のもつ本質的な意味においてはあくまでも二義的なものとなる。

このように考えてくると、看護研究者がケアを論ずる際に、技術そのものではなく、むしろ、ケアするものとケアされるものとの人間関係 (Chao, 1989), ケアの可能性やプロセス (Benner & Wrubel, 1989; Noddings, 1984), 心と体の調和 (Watson, 1988) といった点に注目し、また大切にしていることが理解できる。そして、Mayeroffの「ケアこそがわれわれの生の意味をよりよく理解する」(1971 : p.3) という言葉を考えれば、看護のみならず、すべての人間関係の基本にケア——他者に心が向いている状態——を置いて、日々の具体的な行動の指針としなくてはならない。Tschudinが言うように、「ケアの実践は看護において顕著であるが、必ずしも看護のみに特有のものではない」(2003:

p.1) ののである。「ケア」が行動の規範となるという意味で、「ケアの倫理 (ethics of care)」はすべての人間が、人としてよく生きていくために考えなくてはならない不可欠の問題である。

注

1 本論の「careとcureの根本イメージと意味分化」の内容は、その大部分が江藤(2002;2005)による。意味分化の理由についての仮説と語源に関する参考文献は省略するので、江藤(2002;2005)を参照のこと。

2 offの同族語であるofは、in the sphere of～(の範囲内において)が原義。ofの語源と用法は江藤(1993)を参照。

3 I don't care what you think. [あなたが何を考えているか気にしない]のように、thatやwhatなどに導かれる節がcareに続く場合のcareは他動詞のように見える。これは、I don't care about it what you think. (itはwhat you thinkを指す)のabout itの部分脱落したと考えることができる。その意味で、I don't care what you think.における動詞careは擬似他動詞であり、したがって、careは本来的には自動詞と見て差し支えないだろう。この点については、Visser(1984)を参照。

文 献

- 安藤三郎(1999): 知的創造と場「ケア」の概念. 日本ホスピタリティ・マネジメント学会誌, 6: 11-17.
- Benner, P. & Wrubel, J. (Ed.) (1989): *The Primacy of Caring: stress and coping in health and illness*. Addison-Wesley, Menlo-Park, CA.
- Chao, Yu-Mei (Yu) (1989): ケアリングの諸概念. 日本看護科学会誌, 9(2): 38-45.
- 近田敬子(1993): 「ケアリング」の概念と研究方法を模索して. 看護研究, 26(1): 40-47.
- 江藤裕之(1993): 前置詞ofから見たgenitiveにおける「所有」の意味について—be of～から考える. ASTERISK, 2(5): 163-176.
- 江藤裕之(2002): careとcureについて—語源と意味変遷からcareとcureの本質に迫る. *Quality Nursing*, 8(9): 45-51.
- 江藤裕之(2005): 看護・ことば・コンセプト. 文光堂, 東京.
- 日野原重明, 永井敏枝, 中西睦子他編(1995): 看護・医学事典, 第5版. 医学書院, 東京.
- 市川繁治郎編(1995): 新編 英和活用大辞典. 研究社, 東京.
- 生田久美子(2002): 教育的関係の基礎概念としての「ケア」. *Forum on Modern Education*, 11: 141-150.
- 伊藤洋子, 稲吉久美子(2001): 福祉領域におけるケアリングの文献研究の現段階. *福祉研究*, 90: 73-80.
- 小西友七編(2001): ジーニアス英和大辞典. 大修館, 東京.
- Mayeroff, M. (1971): *On Caring*. Harper & Row, New York.
- 操華子, 羽山由美子, 菱沼典子他(1996): ケア/ケアリング概念の分析—質的・量的研究から導き出された諸属性の構造. *聖路加看護大学紀要*, 22: 14-28.
- Noddings, N. (1984): *Caring: a feminine approach to ethics and moral education*. University of California Press, Berkley.
- Paley, J. (2006): Past caring. The limitation of one-to-one ethics. In A. J. Davis, V. Tschudin, L. de Raeve (Eds.), *Essentials of Teaching and Learning in Nursing Ethics. Perspective and Methods*. (pp.149-164). Churchill Livingstone Elsevier, Edinburgh.
- Reich, W. T. (1995): Care. In W. T. Reich (Ed.), *Encyclopedia of Bioethics* (Vol. 1, pp.349-374). Macmillan, New York.
- 齋藤勉(2003): 教育的ケアリングとは何か. 日本看護学教育学会誌, 12(3): 21-29.
- 佐藤幸子, 井上京子, 新野美紀他(2004): 看護におけるケアリング概念の検討—わが国におけるケアリングに関する研究の分析から. *山形保健医療研究*, 7: 41-48.

- Sinclair, J. (Ed). (1995): *Cobuild English Dictionary*.
HarperCollins, London.
- ステッドマン医学大辞典編集委員会 (2002): ステッドマン医学大辞典, 第5版. メジカルビュー社, 東京.
- 常葉恵子編 (1992): 看護英和辞典. 医学書院, 東京.
- Tschudin, V. (2003): *Ethics in Nursing: the caring relationship*. 3rd ed. Butterworth-Heinemann, Edinburgh.
- 筒井真優美 (1993): ケア／ケアリングの概念. 看護研究, 26(1): 2-13.
- Visser, E. Th. (1984) : *An Historical Syntax of the English Language*. E. J. Brill, Leiden.
- Watson, J. (1988) : *Nursing: human science and human care*. National League for Nursing, New York.
- 山岸知幸 (1996): 「ケア (care)」概念の教育方法学的検討—ネル・ノディングスの「ケアリング」論を中心に. 中国四国教育学会教育学研究紀要, 42: 283-311.

【Summary】

Semantic Difference between “Care” and “Cure” from a Diachronic-Syntactical Perspective

Hiroyuki ETO

Nagano College of Nursing

The concept of “care” plays a vitally important role in nursing science. A number of nursing theorists have explored it, and provided discussions and conferences concerning this topic since 1980’s. For all such efforts, we are just able to give a vague notion of “care,” not its precise definition. In the present paper, I try to examine two contrastive words “care” and “cure” from linguistic, i.e., semantic and syntactic, viewpoints focusing on their etymology, semantic change, and verbal usage, for the purpose of presenting a linguistic perspective for concept-analysis of “care.” As a result, the fact that the verb “care” is a stative verb whose meaning is “to pay attention” and “to sympathize” supports various “care” concepts by nursing theorists. In addition, the etymological meaning of “care”, i.e., emotional attachment, helps us understand the core concept of “care” not only in the sphere of nursing, but also in our everyday life. Therefore, we should lay emphasis on the motto: “Care is everybody’s business.”

Key words: care, cure, concept analysis, etymology, usage

江藤裕之 (えとう ひろゆき)
〒399-4117 駒ヶ根市赤穂1694 長野県看護大学
Tel. & Fax: 0265-81-5138
Hiroyuki ETO
Nagano College of Nursing
1694 Akaho, Komagane, 399-4117 Japan
e-mail: heto@nagano-nurs.ac.jp